

## 付章 8 田辺遺跡の古代の銅工房

高井 晴

1. はじめに
2. 古代の銅遺物
3. 船氏王後墓誌
4. 勢至菩薩像
5. 智識寺の毘盧遮那佛

### 1. はじめに

銅の工房遺跡が国分中学校の西南の隅で鍛冶工房と共に発見された。西側は急な坂で南側は絶壁に近い崖になっている。遺物は銅塊、銅滓の小片多数と溶解炉壁、鋳型、焼け石等の他に数枚の布目平瓦と豊浦寺出土に似た軒丸瓦一枚であった。又同時に出土した土器の年代から六世紀第四四半期から八世紀第一四半期までの遺跡とされている。

銅の工房が柏原市域で見つかったのは山下寺跡、太平寺・安堂遺跡、船橋遺跡について四ヶ所目である。全国でも有数の鉄の工房遺跡を持つこの地区で銅の遺跡が意外と少なかったのは恐らく銅が加工しやすく再生されてしまうことが多かったことに原因があるだろう。遺物の銅塊は切断すると美しい銅の赤い断面を見せるが磁石をひきつけるだけの鉄分を含んでいることは注目される。布目瓦は鋳型を保護するために囲ったと考えられるが軒丸瓦が一枚出土しており極近くに寺院跡が出現する事も考えられる。現在確認されているこの時期の古代寺院跡は東に河内国分寺の前身寺院と考えられる鋤田寺と田辺廃寺、川を隔てて西に片山廃寺・原山廃寺・五十村廃寺があった。断崖絶壁の上部にあるこの遺跡の炉で熔かされた銅を崖下の大型の鋳型に注ぐにはいい立地条件を備えていると考えることが出来る。この頃の工人は一定のところにとどまらず、仕事のある場所に出かけていってそこに工房を造ることが多かった、にもかかわらずこの工房は一世紀を超える期間続いている様子から寺院の密集地域の中にあって特異な遺跡なのかもしれない。又大型の鋳造品を長期にわたって制作していたやも知れない。今回の銅工房と関連を持つと考えられる遺跡や遺物を取り上げて試論を述べる。

### 2. 古代の銅遺物

さて柏原地区での銅製品にはほぼ確実に舶載品と考えられる東京国立博物館蔵の多鈕細文鏡を筆頭に小銅鐸、玉手山の銅鐸、銅鎌、それに古墳時代の金環、笄、鏡、古代のアイロンといわれる熨斗、と古代寺院跡からは九輪、風鐸等多数の出土品がある。

### 3. 船氏王後墓誌

中でも国宝に指定されている船氏王後墓誌と呼ばれる銅板の墓誌がある。この出土状況・年次などはまったく不明であるが、松岳山から出土したものが西琳寺に伝わり明治の廢仏毀釈で市中に流失し今は三井家に所蔵されているものである。今回の工房遺跡とは地域的には近い出土地である。

墓誌は舒明天皇十三年辛丑の歳（六四一）に船氏王後首は亡くなったと記している。当遺跡の時代とも符合するものである。

この種の銅板は概して自然銅で造られているという。自然銅は天然に産する純銅に極めて近い銅鉱石でどの鉱山でも量の差はあるが全て産出する。この銅に鉛等を加え鋳造といわれる方法で鋳型に流し込んで成形した後鍛造と呼ばれる叩き延ばしで板を作っている。自然銅は炭酸銅が自然で純銅に変化したもので、これまでに六万トン程度日本国内で産出しているとされている。初期の銅製品の原料としては他の鋳造品の鋳潰しとこの自然銅を原料として年間五十～六十トンの鋳物が生産されていたとされている。

この墓誌には表面に八六文字、裏面に七六字が書かれており鑽ようの刃物で鏤刻されている。文意は「惟船氏故王後の首は、是船氏の中祖王智仁の首の児那沛故の首の子也。乎婆蛇宮に天の下治めたまひし天皇（敏達）の世に生まれ、等由羅宮に天の下治めたまひし天皇（推古）の朝に奉仕す。阿須迦宮に天の下治めたまひし天皇（舒明）の朝に至り、天皇照見して其の才の異なり仕へて功勲有るを知り、勅して官位大仁を賜ひ、品第三と為す。阿須迦天皇の末、歳は辛丑（六四一）に次る十二月三日庚寅に殞亡す。故戊辰年（六六九）十二月、松岳山上に殯葬す。婦安理故能刀自と共に墓を同じくし、其の大兄刀羅古の首の墓と並びて墓を作る也。即ち万代の靈基を安く保ち、永劫の宝地を牢固にせんと為る也。」となる。

又国分神社に伝世した鏡三枚は、元は古墳から出土したものであるが、この種の鏡はこれまで舶載品とされてきた三角縁神獸鏡だが中国の学者の王敬仲氏によって日本産だと指摘され現在なお論争中である。

### 4. 勢至菩薩像

次に称徳天皇（在位七六四一七七〇）創建の縁起を持つ法善寺の融通念佛宗壺井寺に伝わる白鳳様式の菩薩像がある。天正の頃の戦乱で堂宇はすべて焼失しこの像だけが『避雷觀音』という伝説を持って伝わっているという。首の右後に傷痕があり、台座の右前方は大きく壊されている、左前方も欠如・歪みがあり痛々しい。仏像の中心には鉄芯が立てられていて台座の部分には中型が使われている。

総高二六、二粩、像高一九、九粩、三面宝冠を戴き正面の宝冠には水瓶が現されている金銅仏で八角の台座の上に立ち、右手を垂下し天衣を摘み、左手は他に例を見ない螺旋状のものを捧げ持ち、韓国百濟の石仏にも通ずる童顔で微笑みをたたえたかわいい像である。

寺伝では觀音菩薩ということになっているが正面の宝冠に水瓶が表現されていることから阿弥陀

三尊像の脇侍である勢至菩薩像であろう。又勢至菩薩は単独尊で存在することが稀なので阿弥陀三尊仏の脇侍で、もとは三尊揃った立派なものであったろう。宝冠に水瓶や仏像が古くは表現されていない時期もあったこともあり時代は白鳳末まで降るかもしれない。台座の大きな傷跡は右側の中尊と引き離された時のものとも解されるが、本来阿弥陀三尊は本尊の右側が勢至菩薩、左側が觀音菩薩である、従って中尊とは関係のない傷かもしれない。要はその後の觀音信仰の普及から勢至菩薩を觀音菩薩として信仰されてきたものと解される。

日本書紀天武天皇十四年（六八六）三月の条に「壬申（廿七日）に、詔したまはく、諸国の家毎に仏舎を作りて、すなわち佛像及び経を置きて、礼拝供養せよ」とのたまふとある。仏舎を「ほとけのおほとの」と読むところから立派な堂塔伽藍を意味すると解釈されるが、この七世紀末の時期では一般には小堂でもよかったと思う。そこにまつられる仏像も畿内といえども全ての仏舎に丈六像が存在したとは思えない。通常この尊像の形式は念持仏としてきたが、この場合立派に一寺の本尊を勤めていた貴重な遺品と考え得る。ただ寺の創建縁起が尊像の造像年代より降ることと、小像であるため客仏として移動してきたものと考えざるを得ないが、今回出土の遺跡と時期的に重なり注目すべき尊像である。

## 5. 智識寺の毘盧舍那佛

続日本紀によれば天平十二年（七四〇）に聖武天皇が拝された太平寺の智識寺には毘盧舍那佛の大佛があった。

智識寺は聖德太子伝暦に書かれている未来記により推古天皇二十七年（六一九）から一〇〇年のちにあたる養老三年（七一九）に盧舍那大佛を覆う金堂が完成したと考える。聖德太子伝暦は史料的には聖德太子の信仰と関わる偽文書などと言われ問題の多い文献であるが一〇世紀に書かれたもので現存する智識寺をそこに見て未来の事のように書いている部分に関しては寧ろ大いに信じてよいと解するのである。

智識寺の大仏は古代の教科書である『口遊』に河内次郎と書かれた大仏で、東大寺の毘舍遮那佛と近江の閻寺の弥勒如来との間の大きさの仏像と推測される。

近年柏原地区にとって大変重要な木簡が平城京跡などから出土している。

其の一つは、奈良国立文化財研究所（現奈良文化財研究所）が一九九四年から一九九五年にかけて発掘した奈良・平城京跡左京七条一坊十六坪（奈良市八条町）の東辺を南北に走る東一坊の西側溝から出土した荷札木簡と見なされる木簡に「河内國大縣郡家原（郷）」と書かれていた。同時に出土した木簡に天平二年（七三〇）、廿年（七四八）天平勝宝五年（七五三）天平宝字七年（七六三）宝亀三年（七七二）七年（七七六）の年号が解読されていて、天平時代（七一〇～七九四）に河内國大縣郡に家原があったという事が確定した。

そこで続日本紀和銅五年（七一二）九月に左大臣多治比真人の妻で家原連音那が女の鏡ということとで邑五十戸と連姓を賜ったという記事が思い出される。五十戸すなわち一郷を賜ったということであるから、この五十戸を家原郷と呼ぶならば聖武太上天皇と孝謙天皇の行幸の時期にはこの家原

音那と柏原地区は非常に密接な関係にあった事になる。

其の二つ目は、長門国美彌郡の長登銅山跡で一九九六と一九九七の両年にわたり発掘が行われ多数の木簡が出土した。木簡の年代は同時に発掘された年記木簡から和銅年間から天平初年の間（七〇八～七三五頃）とされたが、その中の「銅付札」と呼ばれる木簡に、書式の上で「何斤枚何」と書かれ、その前に官名や人名が記載されている事が注目された。この官名・人名は銅塊の配分先と見られているもので、「太政大臣」即ち太政大臣藤原不比等（七一〇没）、また「少目殿」即ち長門国司と言った中に「家原殿」と記載されたものが五点報告されている。

既に福山敏男氏の研究で周知のことであるが法華寺の建設にあたり大日本古文書（正倉院文書）十六286に「ニ貫四百文自河内知識寺運生銅車十二両賃両別二百文」という記録があり、智識寺から十二輦もの未精鍊の銅を運んでいる事実である。

左大臣の妻で家原音那が朝廷から賜った自分の家原里で有力な知識となっていたとすれば長登銅山を支配していた事実から智識寺の銅の供給源は明らかである。

一方十二世紀後半に書かれた扶桑略記の応徳三年（一〇八六）六月の条に「同月河内国智識寺転倒。捻像大佛碎如微塵云々。長六丈觀音立像也。」というのがあり、「どうやら智識寺の大仏は盧舍那仏ではなく觀音立像であったのだ。したがって智識寺の大仏は捻造即ち土で作られていた。」といわれたこともあったが、実はこの觀音像についてはもうひとつ同じく十二世紀中頃に書かれた「七大寺年表」の天平勝宝七年（七五五）の条に「二月十日。河内国智識寺觀音造了。立像六丈云々」という記録があり、智識寺には二体の大仏があったことになるのである。「口遊」の後十二世紀前半に編纂された「二中歴」にも「大佛歴 古佛 和太 河二 江三 説云、和太謂東大寺大佛（大和）在添上郡 河二謂河内智識寺在大県郡太平寺 江三近江國世喜寺在滋賀郡」と記録されており応徳三年（一〇八六）後もまだ盧舍那大仏は現存していると考えられるのである。

これらを総合した時、智識寺の盧遮那仏は金銅佛である可能性が濃いのである。

古代の金銅仏で現存する丈六以上の仏像は数体を数えるのみである。その中で薬師寺の金堂の丈六薬師如来は重量が約五トンと計量されている。蟹満寺の釈迦如来は七トンと聞く。東大寺要録卷第二縁起章第二大仏殿碑文には大仏鑄造に「熟銅七十三万九千五百六十斤（約五〇〇トン）。白鑄一万二千六百十八斤。」が使われた。又同碑文に「金知識三十七万二千七十五人。役夫五十萬四千九百二人。」を要したことが記されている。金知識とは鑄造関係の工人である。

仏像の重量は表面積と金銅の肉厚に関係するので簡単には銅の使用量を類推することはできないが、仏像の背丈は東大寺の盧舍那仏が一五メートル、閻寺の弥勒仏が一説によれば六メートルといわれており智識寺の盧舍那仏はおそらく一〇〇～一五〇トン近い銅を要したものと推量する。智識寺の金堂の発掘が進み、像の設置面積などが分かればもっと詳しい大きさが想定できるようになると考える。

今回出土の国分中学校の遺跡で鑄造されたとするなら、完成後は船で運ばねばならなかつたであろう。

銅の生産に関しては先に紹介した長登銅山の発掘・研究が進み、出土した多数の木簡の研究からこれまで分からなかった銅の生産に関する事実が分かってきた。それにともない銅の加工に関する

事も確認され目覚しい進展を示している。

銅の生産といわれるのは、探鉱、採掘、選鉱、焼炭、溶解、精錬、などを経て銅を製造する工程を言い、銅器の生産といいのは鋳型の製作、銅の溶解、鋳込み、仕上げ、あるいは鍛造、加工などの工程と言う。上記の「銅付札」と呼ばれる木簡には書かれている内容は銅の生産物の量とその配分先と見られている。

それには「太政大臣」・「少臣殿」・「家原殿」といった官名や貴族の人名が記載されている事からも分かるように国家による生産がはじまっている。しかし銅器の生産は鋳鉄と別の体系にあること、鋳造は需要地に近いところに工房が設置された、工人は移動していると解されるようになってしまった。

造東大寺解 正倉院文書（続修別集四十七）天平勝宝七歳（七五五）三月廿七日工人が伊美吉の姓を欲しいと申し出ている文書の中に「鋳工無位秦船人 年卅三 河内国高安郡人」があり、河内のこのあたりに鋳工がいて生計を立てていた確かな証拠である。銅工・鋳工には他にも秦氏を名乗るものがいる。秦氏は中国秦の時代に朝鮮半島の地に移住しその後日本に移住してきた事を「姓氏録」に記録されている人たちである。

時代が降るが、延喜式卷二十四主計上に調という税金の記載があり、その中に他の国には見当たらない河内の調として「調。（中略）鍋二百口。（後略）」とある。鋳工や鍛造工が河内には多数居住していた事が推察される。即ち河内は銅の一大消費地であったことになる。

一方銅の精錬のための焼窯跡が長登銅山の遺跡から見つかっている。銅精錬される主な鉱石は硫化銅鉱であるが工程中で鉱石中に混ざっている硫化鐵が鎔錬あるいは精錬して銅の純度を上げるとき銅の上面に浮き上がってくる事が分かっている。又長登銅山の銅が東大寺の大仏用銅の供給先であることが立証されてきているが、そのうち精製された熟銅が30%、未熟銅が10%、生銅と呼ばれる粗銅が実に60%を占めその中でも80%が最下位の品質ということである。例えば大日本古文書五189正倉院文書に天平宝字六年（七六二）四月一日の造東大寺司解の中で「生銅一千五百六十斤や洗銅を一千二百斤を治熟する」という記載が見られる。今回の遺物の鉄分はこの工房では智識寺から法華寺に運ばれたような生銅などを原料としていてその鉄分を含む鉱滓である可能性が大きい。この工房では自然銅だけではなく硫化銅鉱から精錬された銅素材を既に使用していた証拠と考えられないだろうか。

薬師寺の金堂の薬師如来や蟹満寺の釈迦如来など現在みる事が出来る古代の金銅仏は全て一回の鋳造で造られたもの（一鋳式といい）である。東大寺の大仏は五〇〇トンもの銅を使用して八回の鋳造を経て完成したという。しかし、このような鋳造が始めから試しもなしに一気にやれるものではない。聖武天皇は智識寺の盧舍那仏を模範にしたのは知識の力を結集して仏を作るという資金立ての方法だけではなく、その鋳造技術も含むシステムをそっくり利用したのではないだろうか。

以上今回出土した銅工房跡の発掘事実を踏まえて憶測に憶測を重ねてしまった、大方のご批判を乞う。

参考資料

- 1) 『柏原市文化財概報1998－Ⅲ 田辺遺跡-国分中学校プール建設に伴う遺構編-』柏原市教育委員会
- 2) 『春季特別展蓮華百相-瓦からみた初期寺院の成立と展開-』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館
- 3) 『柏原市の歴史講座大県の鐵』1997柏原市教育委員会
- 4) 『東条尾平廃寺跡一鋤田寺跡推定地発掘調査報告書』1973元興寺佛教民族資料研究所  
『日本靈異記』平凡社東洋文庫97中巻第七84頁「智恵のある人が変化の聖人の悪口を言い、閻魔の庁に言って苦しみを受けた話」
- 5) 『田辺廃寺跡発掘調査概要』1972大阪府教育委員会
- 6) 『大阪文化誌季刊第3巻第3号』1978藤沢一夫「河内片山廃寺寺地と伽藍配置」
- 7) 『柏原市文化財概報1993－Ⅰ 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1993年度』1994「第4章原山廃寺」
- 8) 『柏原市文化財概報1983－Ⅱ 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1983年度』1984「五十村廃寺」
- 9) 『考古学研究第一輯』1927「河内新発見の銅鏡と其出土状態」森本六爾・稻葉憲一
- 10) 「柏原市内出土釦子について」韓式土器研究会2001北野重
- 11) 『柏原市文化財概報1995－Ⅱ 高井田山古墳』柏原市教育委員会
- 12) 『天平地宝』帝室博物館1937「船氏王後墓誌拓影原寸大」  
『日本古代の墓誌』奈良文化財研究所飛鳥資料館編 各個解説 東野治之
- 13) 『東アジアの古代文化54号』「自然銅を考える」久野雄一郎
- 14) 『柏原市史第一巻』92頁銅造菩薩立像法善寺壇井寺
- 15) 『日本靈異記』平凡社東洋文庫97 下巻第十八190頁には野中堂という道場が出てくる。現在の野中寺の前身と思われる。「中の太子」として栄えた野中寺であるが奈良朝の始めには未だ「堂」と呼ばれる程度の寺であったらしい。
- 16) 『聖徳太子伝暦』は聖徳太子の伝記で欽明天皇三一年父用明天皇の結婚から太子生誕、推古天皇二九年（六二一）二月の薨去までの事蹟や事件及びその後の山背大兄王一族の自害と大化改新の蘇我入鹿滅亡まで年代順に書かれている。著者は藤原兼輔延喜十七年（九一七）九月成立。  
ということになっているが『聖徳太子伝私記』などの記載から正暦三年（九九二）成立という説もある。「至于河内。駐茨田寺東側。密謂左右曰。吾死之後。二十年之後。有一比丘。智行聰悟。流通三論。救濟衆生。為衆被貴。是比丘非他。是吾後身之一体也。北望大県山西下。謂左右曰。一百年後。有一愚僧。於彼立寺像高大。」この像高大が智識寺の大仏と考える。
- 17) 『口遊』くちずさみは源為憲が天禄元年（九七〇）十二月二十七日に完成した初步教科書。
- 18) 『仁和寺別尊雑記』弥勒画像集に「會坂関之東閻寺五丈弥勒像周五（周尺=七寸）丈也仍居長（座高）二丈治安二年八月十九日建堂巧量奉安置」と復元した閻寺の弥勒像について伝えている。
- 19) 『木簡研究第十七号』16頁「奈良・平城京跡左京七条一坊十六坪」
- 20) 『木簡研究第十九号』188頁「山口・長登銅山跡」
- 21) 『河内の古代寺院物語』柏原市 山西敏一監修 平成13年5月1日  
『史迹と美術370』「智識寺の觀音立像について」田村吉永  
『龍田越』「第六章」山本博昭和46年学生社  
『柏原市史』「古代の柏原」山本昭 昭和48年  
『立命館大大学院論集一』「まほろしの大佛一河内国大県郡智識寺盧舍那佛への問題提起」片平清美  
『日本古代仏師の研究』吉川弘文館「第二章奈良時代における民間の造像活動一河内国智識寺の盧舍那佛の場合ー」田中嗣人昭和58年
- 22) 『日本古代金銅佛の研究 薬師寺編』松山鉄夫「第三章薬師寺金堂薬師三尊像調査報告」
- 23) 『大和文華第九十四号金銅佛特輯』松山鉄夫「蟹満寺本尊釈迦如来像について」
- 24) 『鎌物五千年の足跡』石野亨
- 25) 『日本歴史621』「奈良時代の銅の生産と流通」八木充  
『古代の銅生産一古代の銅生産シンポジウムin長登資料集一』「律令国家と長登銅山生産施設」八木充  
『長登銅山跡II』1993美東町教育委員会  
『銅33号』「過去は最良の預言者」都甲仁  
『銅34号』「書き換えられる?銅の歴史」亀井清
- 26) 『日本古代手工業史の研究』浅香年木「第二章律令期の官営工房とその基盤」
- 27) 『史学雑誌70編3号』「秦氏の研究（1）-その文明的特徴をめぐって-」平野邦雄  
『史学雑誌70編4号』「秦氏の研究（2）-その文明的特徴をめぐって-」平野邦雄
- 28) 『季刊考古学特集第62号古代・中世の銅生産』1998「遺跡・遺物から推定される銅製鍊法」佐々木稔  
『同』「銅関連鑄造遺跡」五十川伸矢
- 29) 『続日本紀』天平十五年十月十五日の条